

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 足立 學

論 文 題 目

The prognostic impact of pulmonary metastasectomy
 in recurrent gynecologic cancers: a retrospective
 single-institution study

(婦人科腫瘍肺転移に対し外科的切除を行った症例の検討)

論文審査担当者

主 査 委員

名古屋大学教授

高橋徳英

委員

名古屋大学教授

長谷川好規

委員

名古屋大学教授

小寺泰弘

指導教授

吉川 実隆

論文審査の結果の要旨

今回、名古屋大学医学部附属病院において治療を行った原発性婦人科悪性腫瘍の中から、孤発性に起きた転移性肺腫瘍に対し腫瘍切除術を受けた患者の長期的予後を解析した。また転移性肺腫瘍に対し外科治療を行った群と化学療法単独で治療を行った群とで臨床学的傾向と生存率に関して比較・検討を行った。

解析の結果、病理学的に類内膜腺癌と粘液性腺癌において統計学的有意差を認めた。また無病生存期間に関しても2年以上の群と2年未満の群において統計学的有意差を認めた。最後に外科治療群と化学療法単独群とで生存率を比較したが、有意差は認めなかつたが外科治療群において生存率が高い傾向が見られた。また転移性肺腫瘍の完全切除が後の予後を改善する可能性が示された。さらに切除後の無病生存期間が長ければ長いほど強い予後因子になる可能性が示された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 病理学的な傾向については5年生存率において、類内膜腺癌が100%であったのに対して粘液性腺癌は50%と有意差を認めた。
他の項目に関しては病理学的に明らかな傾向を認められなかつたが、今後さらに症例を集めることで新たな発見ができると思われる。
2. 今回の研究においては完全切除された症例に限定されており比較はできていないが、他の著者による論文などでは肺転移腫瘍の完全切除は予後に繋がると述べられており、今後研究の余地があると考えられる。
一般的には腫瘍を残存させることにより新たな再発の可能性を残すこととなり、予後を悪化させるであろうと思われ、可能な限り切除することが望ましい。
3. 今回の検討では化学療法によって3個未満に減ったものは検討に入れていない。
今後はさらに症例を増やし、新しい知見が得られることを期待している。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	足立 学
試験担当者	主査	高橋徳英	長川好規	小寺泰弘
	指導教授	吉川史隆		

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 今回の研究について病理学的な傾向があるかどうか
2. 肺転移の完全なる切除は予後に繋がるといえるか
3. 今回の検討で化学療法によって3個未満に減った症例は入っているか

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、産婦人科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員会議の上、合格と判断した。